

# 近くて遠い、でも近い家族の仲 —原初的ケアと社会的ケアの狭間で

清水 哲郎 東京大学 大学院人文社会系研究科 教授

## [講演の概要]

医療・介護の現場で生じる問題の一つに、家族内人間関係（うちの人）と家族外の人間関係（よその人）が併存し、交叉することに由来するタイプのものがある。例えば、重篤な病を患者本人には知らせないようにと家族が強く主張するために、医療者は真実を説明できず、患者が誤った現状認識の下で進む途を選ぶのを手をこまねいてみている、というような場面である。認知症が進んだ高齢者のこれからの過ごし方を、本人の意思・気持ちにおかまいなく家族が決めようとする、というようなこともある。家族のこうした振舞いは、社会の側からは不適切に見えるとしても、家族内に身を置いて見ると、自然に思えるようでもある。こうした場面では、家族内で働く論理・倫理と、患者・介護利用者と医療・介護提供者という他人同士の間で働く論理・倫理との間が齟齬をきたしているのである。

こうした場面でどう考えたらよいかを探るために、この二つの論理・倫理の起源についての構成的な考察が有効と思われる。家族内の振舞いは人間の原初的な小さな群に遡源する。その群の内部では、ケアし合う関係が自然であり、成員間では、〈互いに同じ〉という理解に基づく行動がされており、成員たちは〈一つ〉となって事にあたっていた。これに対して、私たちの社会は、多数の原初的な群が平和的に共存するための知恵を働かせて、長い時間をかけて意識的に作り上げたものであり、そのために〈互いに異なる〉者同士の共存を図る人工的なルールが成立している。

こうした二つのあり方を構成的な枠組みとして、医療・介護現場で起きる上述のような諸問題を見直すと、解決への途が拓けると期待できる。ある人のケアが、家族内では原初的な要素を色濃く残しておりながら、社会化されたケアでもあるという現代の状況をどう理解し、どうよりよいものとしていけるか、考えたい。

## [プロフィール]

東京大学理学部天文学科卒業。東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。文学博士。北海道大学文学部助教授、東北大学大学院文学研究科教授などを経て現職。専門は、西欧中世の言語と論理の哲学、および、医療現場に臨む哲学に基礎をおく臨床倫理学・死生学。著書に『医療現場に臨む哲学』、『医療現場に臨む哲学Ⅱ ことばに与る私たち』（勁草書房、1997、2000）、『パウロの言語哲学』（岩波書店、2001）、『高齢社会を生きる一老いる人／看取るシステム』（編著、東信堂、2007）など。